

その4

これまで体制、それを支える人を考えてまいりましたが、そこでいよいよ、実際に具体的にどんなプログラム、ソフトをやって行けば良いのかに話題を写そうと思います。

(田村氏) では、ここからは三つ目の課題として挙げていただきました「スポーツ・レクリエーションのプログラム」について皆さんに放していただきたいと思います。まず永松さん。障がいのある人もない人も一緒に楽しむ車椅子マラソンを実際に企画してこられたと聞いていますが、どのような工夫をされてこられましたか。

(永松氏) 平成元年に私が企画をさせていただいたのですが、単純な事なのです。車椅子に乗っている方が公道を走りたいと。一般の方がマラソンをしているように我々も走りたいという声を聞いて、よし、それでは作ってやろうじゃないかと。作ってやるのも、我々が企画をするのではなくて、車椅子のメンバーを入れて、一緒に手作りで作り上げたということがございます。そして、楽しいプログラムにするにはどうしよう。せっかくだから福祉にも理解を深めようと、一般の方の部門も作りました。子どもの部門も作りました。ついでに社会福祉施設に入っている方で走りたい方も、そういうコースもつくっちゃえと。もう一つは福祉行政の担当者にも呼び掛けて、実際に車椅子はこんなのだと体験するコースも作りまして、みんなでワイワイとやろうということで始まったのが最初にきっかけでございます。

(野村氏) 車椅子ということでお話をされましたが、ハンドサイクルも普及してきますので、こうした物は障がいのあるなしに関わらず、皆さんに楽しんでいただけるようなプログラムを普及しておりますので、そういった取り組みも全国で拡がると良いですね。

(田村氏) 楽しめるということが本質ですね。そして佐藤さん、実際に実施された経験からプログラムを考えるうえで、どのような視点が大切だとお感じになっていきますか。

(佐藤氏) 実践研究として今回のイベントは行われますので、幾つかの条件があるのですが、これから取り組まれる方がもしもこの中にいるとすれば、福島でやってみて思った事は、まず体力の面。参加者の体力の面からも、余裕を持って関わっていくという面からも、最初からあまり欲張らないほうが良いと思っています。欲張りすぎると続かなくなるというのが実際の感じでもあります。ハードルはだんだん上げていけばいいのですから最初から欲張らない。プログラムについても、確立されたプログラムはもちろん尊重しながら、ただ参加者はいろいろな方々がいるので、その方々に対応したいろいろな楽しみ方ができるような柔軟な発想も大切だと感じました。

(田村氏) まずハードルは低めに、そして柔軟にということですが、藤田先生、学生と一緒に障害者施設などで実践されているということですが、プログラムのやり方や工夫に

ついて何かお聞かせください。

(藤田氏) 最近よく使う言葉ですが、アダプテッド・スポーツとか、アダプテッド・フィジカル・アクティビティという言葉があります。これの意味は、身体障がいや知的障がいのある人にスポーツのほうを合わせてあげるという意味です。一般的には、私達がスポーツをするとき、スポーツに体を合わせて、そのスポーツに合った体を作っていきます。今ちょうど大相撲をやっていますが、あの土俵で有利に取り組みを進めるためには大きな体が有利なわけです。そういう体をスポーツに合わせる。もちろんパラリンピックの選手で、高いレベルで戦っている人は同じように体を作っていくのですが、これから初めてスポーツに参加しようとか、レクリエーションをやってみたいというような障がいのある人に対しては、その人にスポーツを合わせる。ルールや用具ややり方などをその人に合わせてあげるといふ発想が必要になると思います。同じ競技、たとえば先ほどのボッチャという、これはペタンクに似た競技ですが、ボッチャを身体障がいのある人がやる時は一般のルールで良いかもしれませんが、知的障がいのある人がやる時はもう少しルールを簡単にしてやりやすくしてあげるとかの工夫が必要になってくると思います。

(田村氏) 浅野さん。スポーツ・レクリエーション活動というのは障がいのあるなしに関わらず、誰にも生きる喜びをもたらしてくれるものだと思うのですがいかがでしょう。

(浅野氏) 生きる喜びというのは実はたいへん難しい課題ですが、私どもと一緒にレクリエーション運動を推進してくださっているいろいろな団体、40以上のニュースポーツ関係の種目の団体が加盟してくださって、その中には、最近ですが車椅子レクダンス協会とか、通常のニュースポーツの団体、例えばダーツ協会など幾つかの団体ではすでに障害者のためのダーツ大会とか、障害者に対する大会や事業なども進めてくださっています。

また日本レクリエーション協会のある種の十八番ではないのですが、コミュニケーションをより促進させるためのゲームとか運動、遊びなど、まさにそういうものは障がいのあるなしに関わらず楽しめるスポーツ・レクリエーション活動と言えると思います。この15地域での事業の受け皿となっているレクリエーション協会からいろいろなプログラムが提案されますが、そのプログラムの中にさきほど申し上げた種目とか活動を、画一的ではなく、それぞれの地域ごとに合った工夫をしながら活用していくことで進めています。

しかし、それまでの交流もさることながら、その後の、もっと有機的なおつきあいに繋げることを考えると、交流をもっと促しやすい種目を探すとか、新しい用具を開発するとか、さきほど藤田先生もそういう事を含めてご研究されているわけですが、そういった用具の開発にもこれから取り組んでいく、今後の大きな重要な課題になると考えています。

(野村氏) 今お話をいただいた、柔軟に考えていくことが重要なポイントだと思いますが、これまでは障がいのある方に向けてこういう事をやりましょう。そこで工夫された用具やプログラムをやりましょうとやってきた。本事業で一番の狙いとしているのは、障が

いのある人もない人も一緒に楽しみましょうというところですので、その目線をどこに合わせるのか。先ほど佐藤さんからも体力の面でいろいろ考えなければいけないという所もありましたが、みんなが一緒に楽しむというのは、一人一人のニーズにどう合わせるかに繋がると思いますので、障がいのある人だけに合わせるのではなくて、みんなに合わせるという所がこれから工夫していかなければならない所だと思います。それでないとみんなが楽しんだと思えないわけです。支える側、支えられる側ではなく一緒に楽しむのだということが狙いですので、そのためのソフト、プログラムはどうあるべきかを考えていかねばならない。そしてそういうソフト、プログラムを通じてどのように交流が促進されるようになったかを見て行くのが大事だと思います。

そうしたプログラムをどうすれば良いかを考える重要な視点としては、アセスメントをすることが重要になってくると思っています。どのような方が、障がいのあるなしに関わらず今回のプログラム、イベント、事業に参加していただけるのかをきちんと把握して、この参加していただく方々にどのようなプログラムを提供すれば楽しんでいただけるかをしっかりと理解したうえでプログラムづくり、企画、計画をするのが重要になってくると思っています。そうした中で、障がい当事者の意見もしっかりと取り入れながらということになると思いますが、単発のイベント、プログラムで終わることなく継続的なプログラムを柔軟に対応しながら、参加される方のニーズに応じてやっていく。そういったプログラムを考える力も、こうした事業の中から皆さんといろいろな研究をしていく一つの内容になると思っています。そういう意味で、そうしたプログラムをやったとしてもやりっぱなしではなくて、そのプログラムがどのように受け取っていただけたか、どのような評価をいただけたかという事業評価をきちんとしておくことが、次への改善につながる重要なポイントになると思しますので、次のパートではそうしたプログラム、ソフトを行った後の事業評価に視点を置いて皆様のご意見を伺えればと思います。

(田村氏) 中平さん、事業の継続性という点で事業評価を重視されているとのことですが、その辺りを教えていただけますか。

(中平氏) 本事業は単発のイベントとしてお祭りに盛り上がって楽しければ良いというものではなくて、実践研究事業と言っているように、実践しながら研究する。要するに試行錯誤することが織り込み済みの事業なのです。だからきちんと実践した後は評価をして、更にどのようなやり方をすれば障がいの有無に関わらず地域においてみんながスポーツを楽しめるかを達成できるかにおいて、より良い方法を見つけていくのが目的です。なので、きちんと事業をやった後は評価をする。自分の所でやった事業について良い面と悪い面をしっかりと見据えたうえで、今後どうしていったら良さを形に残してもらおう。同じ失敗を他の地域でもする必要はないので、それを皆さんで共有していくのも大切な観点だと思います。また更に、障がいの有無に関わらずその地域においてスポーツを楽しむのは新しい視点であるので、今までそれについて十分に何かをやってきたというのはまだない。新しいチャレンジであるということもあるので、これをどのように評価していくの

かという評価方法についても、この事業を通じて開発していければというのが狙いの一つでもあります。

(田村氏) 野村先生、今回の事業の事業評価の方法というのはどのようなものでしょう。

(野村氏) 今回の事業、15地域でモデル事業として行いますが、全ての地域でやっていただく手法として、これは福祉レクリエーション・ワーカーの皆さんはもう学習されていると思いますが、エーパイ(APIE)プロセスに基づいて事業を実施していただくということになっています。APIEのAはアセスメントです。パイのPはプログラミングです。そしてIはインプリメンテーション、実施をするということです。最後のEはエバリエーション、評価ということです。これを連続して、アセスメントをして、プランニングをして、実施をして、評価をするという。これをエーパイプロセスと呼んでいます。こうしたサイクルをしっかりと繋いでいただいて事業を運営していただくことを共通の事項にしています。

まずは参加される皆さんの状況をしっかりとアセスメントする。あるいは実施する場所とか財源も含めて何ができるのか、何ができないのかを含めてしっかりとアセスメントする。そのうえで、どういうプログラムをすると皆さんに楽しんでいただけるのかをしっかりとプランニング、計画をする。そしてその計画に基づいて実施をする。実施をして、そのまま終わりではなくてその成果をしっかりと検証し、事業評価として評価を加えるという、このプロセスが大事だと思います。

この評価をすることが、このプログラムのどこが良かったのか、あるいはどこが改善すべきなのかがはっきりしますので、改善すべき点を明確にすることによってそこを改善して再アセスメントをする。そして次のプログラムに繋げることができます。こうしたAPIEプロセスを続けることによって継続し、かつより良いプログラムに成長していくことになるとと思いますし、常に感覚的に感情的にこれが良いのではないかとというのではなくて、きちんとした根拠に基づいたプログラム実践が行えるし、新たな改善に繋がると考えております。

(田村氏) 藤田先生は事業評価をする視点としてどのような物を考えていらっしゃいますか。

(藤田氏) これまで皆さんがおっしゃった事と重なる部分が多いと思いますが、評価というはどうしても点数をつけてしまう。例えば今年であれば15カ所で事業をやって、どこが一番よかったか、どこが一番だめだったかということではなくて、あくまで次の事業あるいは次の年度の事業に繋げていく。だんだんと質を高めていくという作業。そういった考えでやるべきだと思います。だから、うまく行かなかった事をざっくばらんにお互いに出し合って、それをどうしてそうだったのか、先ほど福島の事例で障がいのある人とない人が一緒に上手くできなかった。そこにいたスタッフの方もそれを促すことができなかつ

たとありました。それはどうしてそうなったのか。例えば今回は7月ぐらいに決まって9月にやっていますから、もしかしたら十分な期間がなかったのかもしれないし、あるいはスタッフのトレーニングをする中でそういった所が想定されていなかったかもしれない。ならば次回のトレーニングでは実際にこういう場面があったらこうしましょうね、どうしたら良いですかというような講習を入れていけばいいですね。そういう風にしてだんだんと良くしていく。それをみんなで共有していくという考え方が必要だと思います。

(田村氏) 永松さんから見て評価の根拠としてどのようなポイントが挙げられますか。

(永松氏) 評価はたいへん難しいと思っていますが、誰がどういう視点で評価するのかわかりませんが、その前に参加者や当事者の声を大事に知恵や工夫を出していかなければと思います。福祉の立場で言うと、プログラム参加者が事業を通して障害者福祉または障害者の理解を深めた、または今と一緒に生きる一人の人間として成長できる、または意識の変化が出てきた、そういう事が大きなポイントの一つになると思っています。それだけではなくて、プログラムの後の日常的な関係、繋がりもきちんと評価をしていく。人と人を繋ぐ実践になっているのか、人と関わり合うことで人を育てる視点になっているのかも評価する点では大事だと思います。それからもう一点、継続的な関係も押さえる必要があると思います。

(野村氏) 今回15地域でモデル事業としてやるということで、佐藤さんの所ではもう一度やっていただいたのですが、実は今回の事業をするうえで事業評価をする観点で、事前に参加される方々に調査をしております。そしてプログラムが終わった直後に事後評価も取っています。更には追跡調査として少し時間が経ってからどうだったかについて評価を取るという三段階で評価をする仕組みにしております。こうしたことは非常に手が掛るのですが、やはりこのプログラムが参加された方々一人一人にとって、そして参加されたスタッフ一人一人にとってどのような意義や意味を感じ取っていただけたか、あるいはこちらの意図する事がしっかりと伝わったかどうかを、事業評価としてまとめていく手法を取っていますので、これはまた全地域が終わってから取りまとめることとなりますが、今回はこうしたこまめな評価の取り方にチャレンジしていますし、実際にそうした事をやっていらっしゃる佐藤さんはいろいろとご意見があると思います。

(田村氏) 佐藤さん、お願いします。

(佐藤氏) 中平さんや藤田先生からご指摘をいただいたとおり、福島の場合はイベントとしてはもしかすると決して上手く行ったわけではないのではないかと正直思います。ただ、参加者の中には、先ほどボッチャに参加していた女性の方だと思われませんが、今月から隣の市でボッチャのグループのチームに入ったという連絡をいただいたり、またはハンドバイクを車椅子に取りつけて自転車のように手こぎをするのですが、ハンドバイ

クをやっている障害者の方が、県内で行われている遊びの城というレクリエーション協会の事業に参加してくれて、子ども達にハンドバイクの紹介をしてきているという新しい動きが生まれてきています。また卓球バレーという種目もやったのですが、その道具を買いたいという話とか、日本レクリエーション協会にも登録されているコーフボール協会の方に来ていただいたのですが、車椅子でやることは考えていなかった、今度ぜひ考えてみたいと言うお話をいただいたりしてきました。そういうものがこの交流イベントの宝物だったのだと考えています。こういう成果を次にどう活かしていくのかを考えるためには、交流イベントから何が生まれたか、どんなお付き合いが生まれたかを前向きに検討していかなければいけないと思っています。特にこれから一般に参加者を募集して、その後でアセスメントをしようという地域もたくさんあるのではと思いますが、そういうやり方はレクリエーション関係者にとってはとても稀な事業かもしれません。稀な経験なのかもしれませんが、でも、失敗は宝ですから、勇気を持って挑戦してみるべきところだと思います。そのうえで、終わった時に何が狙いだったのかを、関わったスタッフみんなが本音で語り合ってみることが必要です。もう面倒だから止めようと言ったらそれで終わりになってしまうので、後ろ向きにならない。前を向いて検証することが長く続けていくポイントになると、やりながら、自らも考えています。

(野村氏) 福祉レクリエーション・ワーカーの養成カリキュラムの中にはAPIEプロセスを学ぶというのが入っていますので、そうした方々はよくお分かりだと思いますが、一般のレクリエーション指導者、レクリエーション・インストラクターとかレクリエーション・コーディネーターになるとまた違った観点があるかと思います。浅野さんにお伺いをしたいのですが、レクリエーション協会として指導者養成をする段階で、プログラムを実施する現場の担い手になっていただくのですが、こうした事業評価を組み入れるのはなかなか負担になるという話も出てくるかと思いますが、協会としては事業評価についてどんな風感じられますか。

(浅野氏) レクリエーション活動はとかく単なる遊びかと思われがちなのですが、実はその裏に様々な効果を包含されています。その事をきちんと浮き出させるためにも、そういう事業でも評価は必要だと思います。そのことによってレクリエーション指導者のカリキュラムが精緻なものに発展していくので、日本レクリエーション協会としても評価は辛いところもありますが、面倒くさいこともありますが、もっときちんとした形で取り上げていきたいと考えております。

(野村氏) 英語で恐縮ですが、Based on Evidence という言葉があります。しっかりとエビデンス、評価の結果に基づいてプログラムをしていく。つまり私達がレクリエーション活動をするときに楽しかったと言っていたことが大事なのですが、そのプログラムのどこが楽しかったのか、なぜ楽しかったのか、どうすればもっと楽しいと感じていただけるのかを、感性や経験知だけではなくてしっかりとエビデンスに基づいて社

会に訴えて行くことが、レクリエーション・ムーブメントを支えるうえでもこれから大きな課題になってくると思います。そういう意味で、障害者スポーツ指導員の養成でもこうしたプログラムの事業評価を今後もう少し重要になってくると思います。障がいのある方にプログラムして障がいの軽減に繋がるなどは見られますが、心理的な要因や社会的な要因など、本当にこのプログラムをやって社会参加が進んだというところはエビデンスとして取っておくことも重要だと思います。藤田先生、そのへんをどうお考えでしょう。

(藤田氏) 全くその通りだと思います。障がいのある人がスポーツに参加していくときに、参加できない人がまだたくさんいるので、それはどうしてかというところを見ていかなければいけないし、参加してその人がその後一生涯の、障がいスポーツに繋げていくことができなかつた場合、なぜできなかつたのか、どういう条件が必要だったのかをきちんと評価して、それを次に活かしていく。あるいは障害者スポーツの振興策に活かしていくことが必要になってくると思います。

(野村氏) そうですね。スポーツ・レクリエーション活動を、障がいあるなしに関わらず皆さんでいかに楽しんでいただけるかが本事業の一番の狙いですので、そうした今年度の事業成果をしっかりとまとめていくのが重要だと思います。継続の重要性とそのための事業評価の大切さを確認しつつ、やはり参加していただいた方々がいかに行動変容していきけるか、その追跡調査でいかに行動が変わっていきけるか、いかに日常生活の状況が変わっていきかという所もしっかりと評価の中に加えていく必要があると思います。

(田村氏) 皆様にもご意見をいただきたいところですが、そろそろ時間も迫ってまいりましたので、まとめに入りたいと思います。最後に野村先生お願いします。

(野村氏) 今日のシンポジウムをお聞きいただいて、どのような事をお考えいただきましたでしょうか。まずは今日のシンポジウム全体をまとめてみると、やはり障がいのあるなしに関わらず、共にスポーツ・レクリエーション活動を楽しむ中でその楽しみを継続しつつ、そしてそれが日常の生活をしている地域で行われる。いつでも誰でもどこでも参加できるという状況をどのようにしたら作っていきけるかというところにチャレンジをしていくところが、今回の事業の一番大事な所だと思っています。

そういう意味では、例えば行政の側面でもスポーツ庁の検討が図られ、それが実現していくとすれば、それも一つの前進だと思いますし、それから今、総合型地域スポーツクラブが重点を置かれているので、この総合型地域スポーツクラブがより一層多く設立されて、その事業の一環として地域の皆さんに障がいあるなしに関わらずスポーツ・レクリエーション活動を楽しんでいただけるような実態をどのように作っていきけるかが、大きな所だと思います。そのような総合型地域スポーツクラブを運営するための基盤整備、財政支援が具体的にどのように行われるかは大きな課題であると思います。

そして、地域の住民の皆さんを対象にしたスポーツ・レクリエーション関連の行政に留

まらず、レクリエーション協会とか社会福祉協議会とか、障害者スポーツ指導者協議会とか、様々な民間の団体、さらには学校、特別支援学校、あるいは社会教育機関といった教育機関も日常的に連携を図り、お互いに連携し、連絡を取り合いながら、こうした事業を継続的に行うため、そして普及していくことが重要であるというところも指摘できると思います。

いずれにしても、障がいのある人を支えて行く施策に基づく様々な事業、そしてプログラム、ソフトを普及開発していくのは重要なことですし、こうしたために普段からアセスメントをしっかりと、事業評価をしていくプロセスを皆さんと共に日常的に行っていくというような事が実現すれば良いと期待をしています。

(田村氏) ありがとうございます。さて、皆様にお配りをしている資料の中にアンケート用紙がございます。アンケート用紙にてぜひ皆様のご提言やご意見をお知らせいただきたいと思います。受付にペンもありますので、ご活用ください。書き終わりましたらお近くのスタッフまたは出口の回収箱にお持ちいただきますようお願いいたします。本日はたいへんお忙しい中、大勢の皆様にご来場いただきまして本当にありがとうございました。これにて終了とさせていただきます。ありがとうございます。出口が狭いので、お時間のある方はこの場でアンケートをご記入いただきたいと思います。お忘れ物のないようお気をつけてお帰り下さい。ありがとうございます。

終了